
僕とFクラスと試召戦争

いもむし

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕とFクラスと試召戦争

【NZコード】

N4917Z

【作者名】

いもむし

【あらすじ】

松木哲也は振り分け試験の時、水城秋奈の看病をしたためにFクラスに。

彼らの運命は如何に？

プロローグ（前書き）

序文

プロローグ

今坂道を全力で走っていた。

なぜかつて？遅刻寸前だからさ。

「やばいやばい、遅刻しちゃつよー、哲君」

「じゃあ、早く起きてよ秋奈」

哲也ん始めまして、僕の名前は松木哲也です。

今横にいるのは、幼馴染の水城秋奈。

秋奈の寝起きはひどく起じこむも起きないんだ。
だから今いつやって走っているんだけど。

「おはよう松木、水城」

「おはようございます、西村先生」

「遅刻ぎりぎりだぞ」

「すいません、僕がしっかりしてないから」

「まあいい、ほれこれが一人の振り分け結果だ残念だつたな」

僕と秋奈は振り分け試験を受けていない、秋奈が風邪を引いてそれを看病してたからだ。

「仕方がないことですよ、僕だけ受けるわけにもいけませんし」

「うんね哲君、私のせいで」

「いいんだって、済んだことだから気にしなくていいよ」

「うん！」

「ほら行くよ、遅刻したら大変だから」

松木哲也・・・Fクラス
水城秋奈・・・Fクラス

僕と秋奈の最低クラスの一年間が始まった。

プロローグ（後書き）

ありがとうございました

オリキャラ設定（前書き）

ルルル

オリキャラ設定

松木 哲也

年齢 16歳

性別 男

身長153cm 体重43?

容姿 顔は中の上 童顔

性格 人見知り 友達思い 優しい

特技 治療 持久走（鉄人以上）

趣味 料理 ランニング

得意科目 現代社会 日本史 世界史

苦手科目 英語

水城秋奈とは幼馴染。水城のことは秋奈と呼んでいる

一人称 僕

召喚獣 小さくした感じ

水城 秋奈

年齢 16歳

性別 女

身長168cm 体重ー? B90 (Eカップ) W58 H88

容姿 美人でモデル体系

性格 天真爛漫

特技 ダンス

趣味 水泳

得意科目 数学 英語

苦手科目 保健体育

松木哲也とは幼馴染。松木のことは哲君と呼んでいる

一人称 私

召喚獣 小さくした感じ

オリキャラ設定（後書き）

ありがとうございました

第一話（前書き）

えいわ

第一話

Aクラス前

「すゞこおつきいね、哲君」

「ああ、そうだね」

今はAクラス前にいる。

・・・普通の教室の6倍はある大きさだよ

すごい教室だね。

「さあ、早くFクラスに行くよ秋奈」

「うん」

Fクラス前

「すごい教室だね」

「・・・」

「哲君？」

「・・・」

Fクラス前で僕は絶句した。

「ああ、はいどうか」

「うん」

ガラツ

「早く座れ、蛆虫野郎」

「僕はともかく、秋奈に暴言を吐いたんだから覚悟はできてるよ
ね？」

『美少女に暴言とは二度胸だー。』

『「めんね、少し黙つててね』

『ま、まー。』

「秋奈、ちよつと待つててね」

「五分後ー

「終わったよ

「・・・ピクピク

「すいません、遅れましたーって何で雄一が倒れてるの？』

「いつで、何すんだテメー。」

「君が暴言を吐いたんでしょ？」

「うわ、やつをまぬがなかった」

「いいよ、だよね秋奈」

「うん／＼／＼

「えりあつたの？』

「な、なんでもない

「？席にすわるっか

「うそ

うつていて僕と秋奈は隣りに座る

「いすもないんだね」

「す」「いね哲君」

「えへ、担任の福村慎です、よろしくお願ひします。」

教壇に立つた福村先生は自己紹介をし、黒板に名前を書こうとした
がその手を止めた

理由はチョークがないからである。

「せんせー、俺の座布団綿がほとんど入っていません
申し出て下さい。」

F 「せんせー、俺の座布団綿がほとんど入っていません

「我慢してください」

F 「先生、俺の卓袱台の脚が折れています」

「木工ボンドが支給されますので自分で直してください」

F 「センセ、窓が割れてて風が寒いんですけど」

「わかりました。後でビニール袋とセロハンテープの支給を申請しておきましょう」

それに関する苦情が次々と生徒から寄せられるが先生は我慢してくださいか、自分で何とかしてくださいぐらいしか言わない。

「では自己紹介でも始めましょうか。廊下側の人からお願いします。」

「木下秀吉じゃ。演劇部に所属しております。」

ん? どつかで聞いたことある名前のよつたな気がする。

「……土屋康太」

次は小柄で静かそうな少年、土屋君

「島田美波です。海外育ちで日本語は会話できますけど読み書きが苦手です。あ、でも、英語も苦手です。趣味は」

次はポニー・テールが特徴の島田さん、そして

「吉井明久を殴る事です。」

とても危険な趣味をお持ちのような人だ

「一コホン。えーっと吉井明久です。気軽にダーリンと呼んでくださいね」

次の瞬間、

F 「「「ダアアーリイーーン！！」」

野太い男の大合唱。

「・・・・・・失礼、忘れてください。とにかくよろしくお

願いします」

すごいインパクトのある自己紹介をしてくれた
次は僕の番か。

「松木哲也です、一年間よろしくお願ひします」

次は秋奈の番だ

「水城秋奈です、哲君とは幼馴染です。一年間よろしくお願ひし
ます」

『松木を殺せー』

「え、なつ 何?」

『殺す殺す殺す・・』

「ちよ、待つて何?」

『異端者だー』

ドス×47（クラスのほとんどがカッターを投げて僕のちやぶ台に刺さる音）

—五分後—

『我等ではかなわないのか』

自業自得ですね、ちやぶ台使えないじやないですか。

「哲君、一緒に使お?」

「うんありがとう」一匹

「／＼／＼

「?

そんなこんなで今前だけを言つていいくだけの自己紹介が進んでると

? 「あの、遅れて、すいま、せん。」

F 「「「え?。」「」」

全員がその声の方に目を向けるとそこには一人の女子生徒がいた。

福原「ちょうど好かったです。今自己紹介をしていくところなので、姫路さんもお願いします」

姫路「は、はい！　あの、姫路瑞希と言います。よろしくお願いします！」

途中から尻すぼみな自己紹介を終えて、小柄な体を縮み込ませた。

F 「はいっ、質問です！」

姫路「あ、はいっ。なんですか？」

F 「何でここにいるんですか？」

傍から見れば失礼な質問だけど、ほぼ全員がそう思っていた事だ

つた。

姫路「そ、その……振り分け試験の最中、高熱を出してしまってして……」

AからFまでのクラス分けは、学年末に行われる振り分け試験で決まる。

その試験は難しいという評判だが、途中退席は0点扱いにされるという厳しいテストである。

F「そういえば、俺も熱（の問題）が出たせいでFクラスに」

F「ああ、化学だろ？　あれは難しかったな

姫路さんの言い分を聞いて、一人がそう言ひだした。

F「俺は弟が事故に遭つたと聞いて、実力を出し切れなくて

F「黙れ1人っ子」

F「前の番、彼女が寝かせてくれなくて」

F 「今年一番の大嘘をありがとう」

言い訳になつてないよ?

「はは・・・」

横で秋奈がドン引きしてる

姫路さんは逃げるように、吉井君の近くの空いてる席に着いた。
彼女は席に着くや否や、安堵の息をついて卓袱台に突っ伏して
しまった。

福原「はいはい。その人たち、静かにしてくださいね」

バキイツ！ パラパラパラ……

「・・・！」

なんで？

少したいたいだけで壊れるなんて・・・

福原「えー。代えを持つてきますので、皆さんは自己をしていてくださいね」

少しして担任の先生が戻ってきて再び自己紹介が始まった。

須川「須川亮です。えー、趣味は……」

そんな風に自己紹介が続き、最後に福原先生が声を掛けた。

福原「最後にFクラス代表の坂本君。君の自己紹介をして下さい」

「了解」

答えて坂本君は立ち上がり、ゆっくりと前に出た。その雰囲気で、Fクラス中の視線が集まる

「Fクラス代表の坂本雄一だ。俺のことは、ま、坂本でも代表でも好きに呼んでくれ」

坂本君は一呼吸置いて

「さて……みんなにひとつ聞きたい」

言いながら皆と視線を合わせる。そして、流れるように教室各所に視線を移していくと、

みんなの視線も自然とそれを追っていた。

「カビ臭く、すき間風が通る教室。古く、うす汚れて綿もスカスカな座布団。汚れた上に、脚もガタガタな卓袱台」

そして再びみんなを見てから口を開いた。

「そしてAクラスは冷暖房完備の上、座席はリクライニングシートらしいが……」

ひと呼吸置くと、確認するように告げる。

「不満はないか?」

F『…………大アリじゃあつ…………』『…………』

本音の大合唱

「どうう？　俺だつて不満だ。このクラスの代表として大いに問題意識を抱いている」

あちらこちらから不満の声があがり始めた。

F『『いぐり学費が安いからって、この設備はあんまりだ！　改善を要求する！』』

F『『そもそもAクラスだつておなじ学費のはずだ！　あまりにも差が大きすぎる！』』

F『『そつだそつだ！』』

弓き継ぐように坂本君は口を開いた。

「みんなの意見はもつともだ。そこで、これは俺の代表としての提案なんだが」

坂本君は一呼吸おくと

「Fクラスは、Aクラスに対し『試験召喚戦争』を仕掛けようど

思つ

我がFクラス代表坂本雄一君は戦争の引き金を引いた。

第一話（後書き）

ありがとうございました

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4917z/>

僕とFクラスと試召戦争

2011年12月16日21時54分発行